

Learning from patient' s death

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakada, Mitsutoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00053870

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



死から学ぶこと Learning from patient's death

金沢大学医薬保健研究域医学系 脳・脊髄機能制御学

中 田 光 俊

病院の地下の長い廊下を外来から病棟へ向かうと霊柩車が待つ駐車場に行き着く。ここに病棟で亡くなられた方が運ばれ、静かに見送られる。私はこれまで自身の無力さを痛感しながら何度ここで頭を垂れたことだろう... この廊下を歩くたびに私は沈痛な気持ちになる。

これまで人の死を多く見てきた。私の専門領域は脳腫瘍である。悪性脳腫瘍の方の多くは短い期間でお亡くなりになる。患者さんは初期治療として開頭手術を受け、放射線化学療法を終えるまでに2カ月以上の入院が必要となる。一旦外来通院となるが、1年程度で再発をきたして再入院となり、さほど有効でない再発治療の過程で臥床状態となり意識がなくなっていく。そして、いつしか呼吸が停止する。脳腫瘍による死は、苦しみのない静かな死である。少なくとも外見上はそう見えるし、そう思いたい。初めて外来で診てから、わずか2年以内に半分以上の方は亡くなる。短い期間の付き合いではあるが、それなりに辛い経験となる。初めて診た時から死を前提とする付き合いである。外来でMRI画像を見た時にそういった結末になることを私は瞬時に理解し覚悟するが、患者さんやそのご家族はその時にそうなることをまだ知らない。その短い2年間の間に入院中は毎日、外来通院中は月に1回程度は本人およびご家族と顔を合わせる。病前の患者さんの生活を私は知らない。それまでずっとさまざまな生き方を経て、ここに至ったのであろう。その患者さんのかけがえのない人生の集大成を美しく飾ることができるように、できるだけ寄り添いたいと思う。そう考える姿勢は医師としての根本であり、忘れてはならない。治療している疾患による死は、医師としては敗北である。医療はまだ不完全であることを思い知らされる。敗北の屈辱を絶望感に留めず、少しでも明るい方向に導くことができるよう弛まぬ努力が必要であることを痛感する。

主治医には是非剖検の承諾を得て欲しいと願う。剖検は死者が語る最後の言葉をくみ取ることができる貴重で尊い行為である。医師にとっては自身の選択した医療が果たして正しかったのか、剖検からしか得られないことは沢山ある。新しい知見が次の治療につながる。また、患者さん及びそのご家族に、自身が誠実に対応してきたかが如実に分かる。病院で不快な思いをした患者家族は剖検の承諾を渋る。大事な肉親の死後に更にメスを入れることを許すのは重い決断である。できればメスを入れさせたくないと考えるのは当然であろう。それでも承諾するのは主治医に対する感謝の気持ちと、未来の医療への貢献を願うからに他ならない。ご遺族が快く剖検を承諾されたなら、それは自身の医療に向かう姿勢が間違っていなかったことを実感できる。剖検は主治医のためだけではなく、若い医師、医学部学生、病理医、さらに他職種の医療従事者の教育にも貢献するであろう。私自

身も研修医の時に担当した悪性脳腫瘍の患児の剖検に立ち会ったことが、現在の研究の方向性を決めた。それほどインパクトが大きい経験になるのである。剖検の際には、病変の肉眼的所見のみならず、臓器の局所解剖を精一杯学んでほしい。臓器の局所をあらゆる角度から見るができるのはこの機会の他にない。普段の手術では分からなかった解剖や、疑問に思っていた正常解剖について貪欲に学んで欲しい。

数か月後に行われる病理学教室での臨床病理検討会では必ず質問をして欲しい。肉眼所見ではわからなかった病理所見を担当病理医は時間をかけて丹念に観察している。治療にどの程度の効果があったのか、病気はどこまで進展していたのか、死因は何であったのか明確になる。あらためて臨床経過を振り返り、自発的に疑問点を持ちつつ検討会に参加して死を検証すると良い。剖検所見から派生する研究の種になる事象を見逃さないようにしたい。私は臨床病理検討会への参加を職務上の第一優先にしており、これまで参加しなかったことは皆無である。できれば、主治医は担当病理医と検討を重ねながら、症例報告を世に出して欲しい。一例報告であっても後世に長く残り、世界のどこかで役に立つことは多々あるはずである。一人の死を新しい医療につなげることは、剖検を承諾されたご遺族の意思を尊重する医療者の責務であると捉えたい。

そして、剖検を得たなら、必ず合同慰霊祭には出席して欲しい。出席されるご遺族はきっと担当医がその場にいることを期待していると思う。ただし、ご遺族とお話しする時間は設けられていないし、故意なのかその対話の機会がないように式次第が組まれている。私も合同慰霊祭の時にご遺族とお話したことはない。ただ、お互いにその会に出席していることは、壇上のご霊前に献花する際に分かる。自分の担当した患者さんのご遺族が来られていると分かった時、私は深々と頭を垂れる。次に、私が献花する時にご遺族は私の存在を知る。きっと安堵の気持ちをもたらすのではなかろうか。ご遺族はご家族を失ってから、剖検の承諾という判断が正しかったのかどうか、ずっと思い悩んでいるに違いない。合同慰霊祭で担当医がご霊前で献花する姿を見たとき、きっとその迷いは消え去り安心されるに違いないと私は思うのである。十全講堂の静かな時間の中で、私自身もとても厳粛な気持ちになる。患者さんを死に至らしめた疾患の研究を真摯に続けなければならないと心に誓うのである。毎年のこの行事はあるべくしてある。医師として研究者としてあるべき心持をリセットする大切な瞬間なのだと思う。自身の原点に立ち返るチャンスでもある。

若い医師には是非患者さんの死から多くを学び取ってもらいたい。